

# 法称とその注釈者達による sahopalambhaniyama 論証管見

岩田 孝（著） 藤本 庸裕（訳）

## 凡例

- 一 本稿は、Iwata, Takashi, “Bemerkung zur sahopalambhaniyama-Schlußfolgerung Dharmakīrtis und seiner Kommentatoren,” *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 30-1, 1981, pp. 493-486 の和訳である。
- 二 和訳に際し、読みやすさを考慮して本文を適宜改行して幾つかの段落に分けた。また、文意を損ねない限りにおいて適宜原文の構成を変えたり補足的な語句を加えたりした。
- 三 サンスクリット語及びチベット語の訳文は全てドイツ語訳から重訳した。
- 四 訳文中、チベット語の表記は原則的にワイリー方式で統一した。
- 五 本文中、斜体の箇所は訳文では波線で表記した。
- 六 本文中、明らかに誤植と思われる箇所は訂正しておいた。
- 七 本文中、文末注にあったもののうち、略号と記号以外は訳文では脚注に記した。
- 八 読者の便宜を考慮して、チベット語或いはサンスクリット語の訳文を示した箇所については、その原文或いはそれと関連する原文を訳者注として末尾に記しておいた。
- 九 近年 PVin 等のサンスクリット語原典が発見、出版されたことを考慮して、必要と思われる訳文の箇所についても、新出のサンスクリット語原典の対応箇所を訳者注として注記した。また、訳注研究の対応箇所も注記しておいた。それらの参照文献の略号は以下の通りである。

- PSV(Skt) Pramāṇasamuccayaṅgi (Dignāga): *Dignāga's Pramāṇasamuccaya, Chapter 1*. Ed. Ernst Steinkellner. 2005. [www.oeaw.ac.at/ias/Mat/dignaga\\_PS\\_1.pdf](http://www.oeaw.ac.at/ias/Mat/dignaga_PS_1.pdf) (2017年11月27日閲覧).
- PVin I(Skt) Pramāṇaviniścaya, chapter I (Dharmakīrti): *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya Chapter 1 and 2*. Ed. Ernst Steinkellner. Beijing: China Tibetology Publishing House, 2007.
- 戸崎 [1985] 『仏教認識論の研究 下巻』大東出版社。

I. 法称（Dharmakīrti）の認識論には経量部の立場を唯識学派の立場に還元しようとする試みが見られる。その場合、自己認識（svasaṃvitti）が重要な役割を果たしている。というのも、法称は、自己認識は経量部と唯識学派双方の立場において、認識手段の結果（pramāṇaphala）として見なされねばならないと論証しているからである<sup>1</sup>。本稿では、自己認識に関する論証に決定的な寄与を為している sahopalambhaniyama 論証を取り上げる。そして、論理認識論学派に属する幾人かの学匠達の認識論的な立場に存する本質的な相違を明らかにする。

II. 法称は自己認識を裏付ける論証の基礎に、知識の二形相性（dvirūpatā）を据える。この二形相性は陳那（Dignāga）によって次のように説明されている。「知識は二つの顕現、即ち、それ自身の顕現（svābhāsa）と対象の顕現（viṣayābhāsa）を持って生起する<sup>2</sup>」と<sup>3</sup>。もし知識がこの二つの形相を自身のうちに有するならば、あらゆる認識は自己認識となる。知識の二形相性を証明する二つの論証のうちの一つとして、法称は PVin I において次の論証式を構成する。‘（主張命題：）青とそ〔の青〕の知識とは別なものではない（abheda）。（理由：）何故なら、それらは必ず共に知覚されるからである（sahopalambhaniyamāt）。（喩例：）二月等（dvicandra）等の如し’〈1〉<sup>4</sup>。ここには次の包摂関係が存在する。‘sahopalambhaniyama → abheda’〈2〉。この論証は陳那においては未だ見出せないから、デーヴェーンドラブッディ（Devendrabuddhi）を援用するならば<sup>5</sup>、〈1〉は法称に特有の論証であると想定してよいであろう<sup>6</sup>。

II. a. 注目すべきは、論証式〈1〉は外的対象を認める場合にも有効であるという点である。ダルモータラ（Dharmottara）の解釈によると、〈1〉は外的対象の存在を唱える二つのグループ、即ち、無形相論者

---

<sup>1</sup> See PV III 341-353.

<sup>2</sup> PSV<sup>2</sup> 95b8.<sup>①</sup>

<sup>3</sup> See PV III 426.

<sup>4</sup> See PVin I 55ab<sup>②</sup>; PVin I p. 94, 22-23<sup>③</sup>; PV III 388-391abc.

<sup>5</sup> PVP Che 276a7<sup>④</sup> (PV III 388 に対する注釈).

<sup>6</sup> See Diss. pp. 14-18.

(Nirākāravādin) (→ヴァイパーシカ学派等) と有形相論者 (Sākāravādin) (→経量部) に向けて論式化されているという。「[知識は] 如何なる [対象の] 形相をも [自身のうちに] 持たないという立場 (nirākārapakṣa) [を唱える者] にとって、[知識の] 対象である事物は、[当該の知識と] 結合したものととして顕現する事物であって、それはまた [知識内において実際に] そのように顕照する (?) (see PVinṬ(Dh) Dse 191a6; 190a2-3)。その為、対象と認識とは [二つの] 異なった事物であるという主張は論駁される ([g]<b>sal)。従って、[法称は] このように無形相論に対して、[その知識と] 同時 (tulyakāla) に顕現する [とされる外的] 対象を否定する ([g]<b>sal) 為に、「sahopalambhaniyama」及び「認識」(rig pa, samvedana (?)) という論証因を提示するのである (see PVin I pp. 94, 17-98, 13)。それに対し、[知識は対象の] 形相を [自身のうちに] 有するという主張 (sākārapakṣa) においては、把持されるべき形相 (grāhyākāra) としての顕現 (<snang ba> : D; [gnas] : P) が [知識と] 異なることは全く認められない。それ故に、先生 (法称) は、有形相論 (→経量部の教説) の場合にも、無形相論を論駁する場合のように、全く同じ二つ [の論証因] を提示するのである。そこで [先生は次のように述べている。] 『従って、[sahopalambhaniyama] と「認識」に基づいて (see PVin I p. 100, 1-3)、] 顕現している対象と [その] 知識とは [、たとえ外的対象が存在するとしても、別なものではないということが成立するのである] (= PVin I 59ab<sup>⑤</sup>)<sup>⑥</sup>』と (PVinṬ(Dh) 192b3-7)<sup>⑦</sup>。唯識学派にとって、〈1〉は当然のことながら真なるものとして認められる。故に論証式〈1〉には、有形相論者 (経量部と唯識学派) に有利となるように、無形相論者の見解を論駁する働きがある<sup>7</sup>。

II. b. 法称の後継者達は——認識された対象は単に知識内の形相

<sup>7</sup> コラムパ (Go ram pa) も同様の見解を示している。See Tshad ma rigs pa'i gter gyi dka' ba'i gnas rnam par bsad pa sde bdun rab gsal (Sa skya pa'i bka' 'bum, Vol. 12) 214a5-b1. See also TSP p. 696, 15. 法称の時代以降における sahopalambhaniyama の様々な使われ方については、Diss. pp. 19-25 を参照。

(ākāra) に過ぎないという主張を越えて——、更に、この対象の形相はどのように知識内に存在しているのかという問いを解決しようと苦心した。彼らの種々の見解は sahopalambhaniyama 論証、とりわけ所証特性 (abheda) についての様々な解釈の中に表れている。

1) デーヴェーンドラブッディ<sup>8</sup>、シャーキヤマティ (Śākyamati)、プラジュニャーカラグプタ (Prajñākaragupta)<sup>9</sup> は、所証特性を (対象と主観との) 同一性として理解する ('abheda = ekatva' <3>)。

2) ダルモツタラは、所証特性を区別の単なる否定として ('abheda = bhedapratīṣedhamātra' <4>)<sup>10</sup>、つまりは純粹否定 (prasajyapratīṣedha) の意味で解釈し<sup>11</sup>、先に挙げた学匠達とは違って、同一性 (ekatva/aikya) として<sup>10</sup>、つまりは相対否定 (paryudāsa) の意味で解釈することはない<sup>11</sup>。法称自身の場合、確かにこうした選択肢に対する明確な態度表明は見られないが、sahopalambhaniyama 論証の文脈においては常に否定的な表現を用い、決して ekatva のような肯定的な表現を使うことはない。例えば、na hi ... arhāntararūpatvaṃ nīlasyānubhavāt (PVin I p. 94, 20-22) (「何故なら、青は……その本性として、[その] 感受とは別なものではないからである」) を参照 ('abheda = na ... arhāntararūpatva' <5>)。従って、法称はデーヴェーンドラブッディではなく、ダルモツタラの言うような意味で 'abheda' を考えていたように思われる<sup>12</sup>。

ad. 1). シャーキヤマティにおいては、デーヴェーンドラブッディとプラジュニャーカラグプタとは反対に、或る瑜伽行派の見解を述べる際に、'bhedapratīṣedhamātra' という表現が見られる。この瑜伽行派は、abheda は単に bhedapratīṣedhamātra を意味するのであって、非別性 (= 同一

---

<sup>8</sup> III. c. 1. を見よ。

<sup>9</sup> 例えば、PVBh p. 410, 22-23; ibid 32 を参照 (本稿では PVBh のみを考慮に入れる)。

<sup>10</sup> See PVinṬ(Dh) 182b8-183a2; 185a2-6.

<sup>11</sup> See M p. (18)ff; Diss. p. 96.

<sup>12</sup> アバヤデーヴァスーリ (Abhayadevasūri) も同様の見解を示唆している。See Tattvabodhavidhāyini p. 364, 11-16; Diss. pp. 72-74.

性)を表すのではないという見解に反対している<sup>13</sup>。この瑜伽行派の見解によれば、青等(→対象)が知識内に存在することは否定され得ない。「というのも、[それは] 歓喜(harṣa)等(→主観)の如く、明瞭に(vyaktam(?)) 感受(anubhava)されるからである(PVṬ Ṇe 255a2-3)<sup>⑧</sup>。」つまり、「青等もまた、歓喜等の如く自己認識(rang rig[s])を本性としているというまさにこの故に、(歓喜等と)全く同じように自ら(svayam)その本性上覚知(bodha)であって、他[の要因]の一部でない(PVṬ 255a6-7)<sup>⑨</sup>」限り、青はその知識と同一であり、故に真なるものとして存在するのである。有形相知識論の立場に近い上記の見解の典拠として、シャーキャマティは PVin I 55ab(→〈1〉)を引用する<sup>14</sup>。シャーキャマティはこの見解を論駁していないから、abhedaを対象と主観の同一性と見なす解釈は有形相知識論と関連していると考えられる。

ad. 2). ダルモーツタラは、「把持されるべき形相は顕照している(=認識されている)(prakāśa(?))にも拘わらず偽である(asatya)(PVinṬ

---

<sup>13</sup> See PVṬ Ṇe 255b1-2.

<sup>14</sup> See PVṬ 255b1.

(Dh) 183a2)<sup>⑩</sup>」と認めるが<sup>15</sup>、他方では、「歡喜等を本性とする認識 [そのもの] は拒斥する (bādhaka) [知識] が無い故に真である、ということとは否定できない (PVinT(Dh) 185a4-5)<sup>⑪</sup>」と主張しているので、ダルモータラは、知識内の形相は偽であるが、認識そのものは真であるという見解を示している。しかしながら、真なるものと偽なるものとは同一ではあり得ない。「従って、[sahopalambhaniyama 論証における ‘abheda’ は、] 同一 [性] ではな [く、 bhedapratiśedhamātra を意味している] ということが確定している (PVinT(Dh) 185a5)<sup>⑫</sup>。」以上の議論は、「顕現するものは全て [真なるものとして] 存在する (PVinT(Dh) 184b7-8)<sup>⑬</sup>」という見解をダルモータラが拒絶していることに対応している。それとは反対に、このように形相の顕現 (prakāśa) をその形相の存在性 (sattā) と同一視することは、有形相知識論者の重要な論法である<sup>16</sup>。それ故、ダルモータラは、形相は知識のうちに真に存在しているという有形相知識論者の見解を否定していたと想定することが

<sup>15</sup> See also PVinT(Dh) 182b8: 「何らかの仕方で (?) 顕現しているあらゆるものは、まさにそのように実際に [存在し] ているのではない。というのは、存在していないものも錯誤 (bhrānti) によって顕現するからである<sup>⑭</sup>」; ibid. 184b8-185a2: 「もし反対に (atha)、[顕現が] 偽ではあるものの、[知識のうちに] 存在する (→生起する) ならば、インドラ神 (Śatakratu) であっても、偽なる [形相] を顕現せしめる (ādarśana) \* 自身の能力を否定することはできない。[また、] 如何なる者も、たとえそのようにしたいと思っても、あらゆる感受 (anubhava) が真であると主張することはできないから、偽なる [形相] を顕現せしめる知識の能力を避けることはできない。[知識は] 無明 (avidyā) の影響下のもとに単に偽なる形相 (asatyarūpa) \* を顕すのであって、真なる……を顕すのではない……<sup>⑮</sup>」. \* See Syādvādaratnākara p. 170, 17-19: tasmād ... jñānam asatyarūpam ādarśayatīti ... (= PVinT(Dh) 184b6: de'i phyir ... shes pa mi bden pa'i rang bzhin gsal <bar>(?) [ba'i] byed pa yin pa'i phyir ...).

<sup>16</sup> See JN p. 448, 17-18; 449, 14-15, 445, 4.

できる<sup>17</sup>。

III. a. 法称は (sahopalambhaniyama における) niyama という概念について、次のように具体的に述べている。「この両者のうち、一方 (の形相) が知覚されない場合に他方が知覚されることはない (PVin I p. 94, 23-24)<sup>⑩</sup>」〈6〉。従って、niyama とは、「Y (=認識) が知覚されない→ X (=対象) が知覚されない」〈6-1〉と、「X が知覚されない→ Y が知覚されない」〈6-2〉 (see PV III 390abc) という二つの言説の連言を意味するのである<sup>17-a</sup>。その場合の saha の語は同時 (sakṛt) を意味する。故に、sahopalambhaniyama とは、必ず同時に知覚されることを意味するのである ('sahopalambhaniyama = sakṛd evopalambha' 〈7〉)。これに関して、PV III 388 は次のように示す。即ち、「対象は必ず認識と共に知覚されるのだから、それは如何なる仕方でも [の認識] とは異なったものとして成立し得るのだろうか<sup>⑪</sup>」と。このように saha を sakṛt として用いる出発点は、外境論者 (→ヴァイバーシカ学派等) の前提、即ち、対象は認識の時点において顕われる (jñānakālavabhāsin) が、同時にその認識とは異なるという前提である<sup>18</sup>。法称はこのような両者の存在の同時性を次のような仕方を利用して。つまり、法称はそれを両者の知覚の同時性 (→ sakṛdupalambha) へと変更し、それによって、対象と認識との別性を論駁するのである。更に、法称は sakṛdupalambhaniyama を擁護する<sup>19</sup>。従って、〈5〉と併せると、法称においては、'sakṛd evopalambha → na ... arthāntararūpatva' 〈8〉となるのである。

III. b. ダルモーツタラは sahopalambhaniyama (〈6-1〉〈6-2〉) を肯定的な形で構成する。「或る [特定の] 認識されるべきものの知覚 (jñeyopalambha) は、必ず [同時にこの] 知識の知覚 (jñānopalambha) を本性と

---

<sup>17</sup> ダルモーツタラの見解については、M pp. (18)-(21); Diss. pp. 79-81; pp. 96-97 を参照。

<sup>17-a</sup> 「対象が認識を欠いて [認識される] ことはなく (→ 〈6-1〉)、認識が対象を欠いて (anartham vāpi) 認識されることもない (→ 〈6-2〉)<sup>⑩</sup>。」

<sup>18</sup> See PV III 391abc; Bāhyārthasiddhikārikā 81.

<sup>19</sup> See PVin I pp. 96, 9-98, 6; PVinT(Dh) 187b2-3.



する[という仕方で生起する]のであって、他の仕方で[生起するの]ではない。他方、知識の知覚も[同じように]、必ず、認識されるべきものの知覚を本性〈とする〉(bdag ñid <can>, -ātmaka) [という仕方で生起する] (PVinT(Dh) 185b2-3)<sup>19</sup>。」故に、ダルモータラは、sahopalambhaniyama を対象の知覚と主観の知覚との同一性の関係として、即ち、‘sahopalambhaniyama = eka evopalambha’ 〈9〉として理解している。カマラシーラ (Kamalaśīla) もこの立場を主張する<sup>20</sup>。ダルモータラにおいては、〈4〉と〈9〉から、‘eka evopalambha → bhedapratīṣedhamātra’ 〈10〉となる。

III. c. 1. デーヴェンドラブッディは PV III 335ab に対する注釈の中で sahopalambhaniyama を用いている。「青の知覚が〈把持され (gzung bar/ dmigs par)〉で初めて青もまた知覚される (→ 〈6-2〉)。同様に、青が知覚される場合に、[青の] 知覚が知覚される (→ 〈6-1〉) (PVP Che 261b1-2)<sup>20</sup>。」これは sahopalambhaniyama (〈6-1〉 〈6-2〉) の肯定的な形での論式である。少し後に、デーヴェンドラブッディは次の推論を構成する。「従って、それら (青とその知識) は、たとえ [表象の中では] 異なったものとして顕現しているとしても (bhinnāvabhāsitve 'pi, see PVin I p. 94, 20)、実際には同一である (eka)。何故なら、それらは単一のもの (或いは同一のもの) として知覚される (ekatvenopalambha という意味での ekopalambha) からである。二月 (dvicandra) の如くである (PVP 261b3)<sup>21</sup> <sup>21</sup>。」それ故、デーヴェンドラブッディの場合には、‘sahopalambhaniyama = ekatvenopalambha’ 〈11〉、‘ekatvenopalambha → ekatva’ 〈12〉ということが言える。

III. c. 2. ダルモータラに従えば、sahopalambhaniyama なる論証因は anupalabdhihetu (正確に言えば、vyāpakaviruddhopalabdhi) の範疇に含ま

<sup>20</sup> See TSP pp. 692, 23-693, 1. ヴァーディデーヴァスーリ (Vāḍidevasūri) は、カマラシーラをダルモータラの弟子として捉えていたのであろう。See Syādvādaratnākara p. 155, 20-24; Diss. pp. 60-61. パラレルの箇所については、M p. (34); Diss. p. 61, 注(73)を参照。

<sup>21</sup> See PVP 276b1 (PV III 389 に対する注釈)。

れる<sup>22</sup>。これはダルモータラが帰結を *bhedapratīṣedhamātra* として専ら否定的に解釈することに対応している。一方、デーヴェンドラブッディにあっては、帰結を *ekatva* とする肯定的な解釈に適合した *svabhāvahetu* が問題となる。デーヴェンドラブッディは、法称から借用した二月の喩例（〈13-1〉）のほかに、更なる喩例として、或る事物（X）の自性と事物（X）それ自体（〈13-2〉）を挙げている<sup>23</sup>。〈13-2〉は明らかに同一性が帰結であることを意図している。故に、ダルモータラは、この喩例〈13-2〉によって示される同一性という帰結を容認しないし、同様に、喩例〈13-2〉も是認しない<sup>24</sup>。ダルモータラは *sahopalambhaniyama* 論証（〈10〉）を自ら構成するに当たり、法称と同じく、相互に異ならず<sup>25</sup>、またその知識とも別ではない二月を喩例に用いる。カマラシーラにおいても、対象が主観と区別できない（*na vibhidhate*）ことの例として、第二の（*dvitīya*）月と第一の月が機能している。この場合、否定は動詞（*vi √ bhid*）と関連付けられるので、*prasajyapratīṣedha* の機能を有している<sup>26</sup>。それ故、第二の月は第一の月と単に異ならない／区別されないだけであって、第一の月と同一なのではない。何故なら——ダルモータラの考えでは——、一方が真である場合、他方は反対に偽であるからである。このように見ると、真なる（第一の）月（*saccandra*）と偽なる（*asat*）（第二の）月は、デーヴェンドラブッディの意図する同一性の例としては相応しくないように思われる<sup>27</sup>。

III. d. しかしながら、既に述べたように、デーヴェンドラブッディはこの二月の例を用いている。ただし、その二月において如何にして同

<sup>22</sup> See PVinṬ(Dh) 189b7-190a1 (テキストの異同：<de> [da] dang; khyab bar <byed> [byad] pa).

<sup>23</sup> See PVP 277a2-3 (PV III 390 に対する注釈).

<sup>24</sup> See PVinṬ(Dh) 185a5-6.

<sup>25</sup> See PVinṬ(Dh) 185a8.

<sup>26</sup> See TS 2029-2030; M p. (20); Diss. p. 82.

<sup>27</sup> See Vyomavatī p. 527, 24-25: *saccandrāsaccandrāṭṣānt<aḥ>[o] sadasator ekatvavirodhāt sādhyavikalāḥ*.

一性が担保されるのかを説明することはない。それとは逆に、プラジュニャーカラグプタは次のような重要な指摘をしている。「二月として [誤って] 構想されたものは、[実際には] 二つに分けられない (advaya)。何故なら、それは単一の知識のうちに含まれている (ekavijñānāntargatva) からである (PVBh p. 410, 6-7)<sup>28</sup>。」即ち、二月は、それらが顕現する所の知識が単一である故に、同一なのである ('ekavijñānāntargata → advaya (eka)' <14>)<sup>28</sup>。

III. e. デーヴェンドブッディ、ダルモータラ、法称における sahopalambhaniyama の解釈から、次のような一連の論法を組み立てることができる。'ekatva (デーヴェンドラブッディ、シャーキヤマティ、プラジュニャーカラグプタ) ⇔ ekatvenopalambha <11> (デーヴェンドラブッディ、シャーキヤマティ) → eka evopalambha <9> (ダルモータラ、カマラシーラ) → sakṛd evopalambha <7> (法称)' <15>。以下、この論法について説明しよう。<12>においては、'ekatva ⇔ ekatvenopalambha <11>' <12-1> という相互の含意がある。更に、次のように主張することができる。即ち、対象と主観の同一性は jñeyopalambha と jñānopalambha の同一性 (即ち、eka evopalambha) を含意している。というのも、もし対象と主観が同一であるならば、それらはただ一つの知識によって知覚されるからである。従って、対象の知覚と主観の知覚は同一であり、'ekatva → eka evopalambha <9>' <16> となる。'X と Y の同一性に基づいて、X と Y の同時性が推論される'

<sup>28</sup> 二つであることは、後に生起する分別によって (uttarakālabhāvinā vikalpena) のみ確定され (kalpanā)、直接知覚 (pratyakṣa) のレベルで現前するのではない (see PVBh p. 410, 5-6 (... i-<ndu>[ti] dvaya-))<sup>28</sup>。プラジュニャーカラグプタには、<14>に加えて、'弁別不可能性 (āśakyavivecanatva) → ekatva' (see PVBh p. 409, 26-28; p. 289, 26-27; Diss. pp. 38-43) という、類似した論法が見られる。

〈17〉という論法を用いる場合<sup>29</sup>、もし〈17〉の X と Y を jñeyopalambha と jñānopalambha に置換すれば、‘jñeyopalambha と jñānopalambha の同一性 (eka evopalambha 〈9〉) → jñeyopalambha と jñānopalambha の同時性 (sākṛd evopalambha 〈7〉)’ という含意 (〈18〉) が成り立つ。それ故に、〈16〉は〈18〉の中の〈9〉を用い、‘ekatva → eka evopalambha 〈9〉 → sākṛd evopalambha 〈7〉’ 〈19〉、というように拡張することができる。もし〈19〉が〈12-1〉の意味で拡張されるならば、〈12〉と〈17〉のみを前提として、上記の論法〈15〉が導き出される。

IV. 以上の議論をまとめると以下ようになる。

- a. 様々な学匠達による〈2〉の解釈を記すと、〈8〉(法称)、〈10〉(ダルモッタラ)、〈12〉(デーヴェンドラブッディ、シャーキャマティ)、〈14〉(プラジュニャーカラグプタ)となる。〈2〉(〈8〉)において sādhyadharmā (即ち abheda) が解釈の対象であったことから分かるように、シャーキャマティとダルモッタラの論法は、こうした学匠達が、知識内にある対象の形相は真なるものとして存在しているのか(シャーキャマティ)、それともそうではないのか(ダルモッタラ)という問題を既に意識していたことを示している。
- b. 〈15〉から、デーヴェンドラブッディとシャーキャマティがダルモッタラと法称による sahopalambhaniyama の解釈 (〈9〉と〈7〉) を承認し得ないことが分かる。というのも、彼らの解釈からは必ずしも同

---

<sup>29</sup> = ‘X と Y の非同時性 → X と Y の別性’ 〈17-1〉。この論法は、ダルモッタラにおいては、対象の知覚と主観の知覚の同一性 (〈9〉) に対する対論者の反論の中に現れる。「また、[対象の感受と主観の感受が存在する] 時間が異なるという事実を鑑みれば、[対象の] 感受 [と主観の感受] は必ず異なることになる。何故なら、それらの時間の別性は、諸事物の別性の「論理的な」根拠であるからである」(PVinT(Dh) 187b1-2, PVin I p. 96, 8 に対する注釈)。これに対する論駁において、ダルモッタラは確かに時間の別性を否認してはいるが、〈17-1〉という考え方そのものを否定してはいない。カマラシーラも〈17-1〉を認めている (see TSP p. 693, 17-18)。

一性が帰結しないからである。シャーキヤマティは明らかに〈7〉(sakrd evopalambha)を排除している。何故なら、同時性は単一性／同一性ではなく、逆に多性(citratva)を含意するからである<sup>30</sup>。全く同様に、プラジュニャーカラグプタもまた、〈9〉と〈7〉を十分な論証因として認めない。それは、プラジュニャーカラグプタにとっても、同一性は〈2〉における所証特性として機能しているからである。それ故、もしプラジュニャーカラグプタが sahopalambhaniyama 論証の範囲内で〈9〉を用いないならば、それは整合的なのである。

c. 〈15〉に従えば、ダルモーツタラによる論証因の解釈(〈9〉)からは必ずしも同一性を導き出せるわけではないので、ダルモーツタラが同一性を帰結とするデーヴェーンドラブッディの解釈を否定していることに矛盾は無い(II. b. ad. 2.)を見よ)。法称にとっても、〈15〉による限り、〈1〉の abheda を ekatva とする解釈は強すぎるのである。これが、法称が帰結に ekatva のような肯定的な表現を決して用いなかった理由の一つであろう。

---

<sup>30</sup> See PVT 271a8-b1 (PVP 261b3, PV III 335 に対する注釈).

〈略号〉

- Diss. T. Iwata, *Sahopalambhaniyama – Struktur und Entwicklung des Schlusses von der notwendigen Zusammenwahrnehmung auf die Nichtverschiedenheit*.  
Diss. Hamburg 1980.
- JN Jñānaśrīmitranibandhāvalī.
- M S. Matsumoto, “Sahopalambhaniyama.” 『曹洞宗研究員  
研究生研究紀要』 12 1980.
- PVinT(Dh) Pramāṇaviniścayaṭkā (Dharmottra).
- その他の略号は、E. Steinkellner, *Dharmakīrtis Pramāṇaviniścayaḥ, Zweites Kapitel*. Wien 1979 に従う。

〈記号〉

- < > テキストの補足。
- [ ] サンスクリット語とチベット語ではテキストの削除。  
翻訳文では補足。
- ~ 否定。
- 含意。

〈訳者注〉

- ① PSV<sup>2</sup> P 95b8: shes pa ni 'dir gnyis su snang bar skyes te / rang gi snang ba dang yul gyi snang ba'o // . Cf. PSV(Skt) p. 4, 4: dvyābhāsaṃ hi jñānam utpadyate svābhāsaṃ viṣayābhāsaṃ ca.
- ② Cf. PVin I(Skt) 54ab: sahopalambhaniyamād abhedo nīlataddhiyoḥ /. 著者が参照しているティルマン・フェッターによるチベット語のテキストと、近年公刊されたサンスクリット語のテキストの間には、偈の数え方に不一致がある。
- ③ Cf. PVin I(Skt) p. 40, 1-2: na hi bhinnāvabhāsitve 'py arthāntaram eva rūpaṃ **nīlasyānubhavāt** tayoh **sahopalambhaniyamād** dvicandrādivat. 太字は訳者による。
- ④ PVP Che P 276a7/D 234a3: de ltar na yul gyi (D; gyis P) shes pa (D; shes P) zhes bya ba la sogs pa bshad pa'i phyir / nges pa blo

dang bcas pa ni (P; ni // D) zhes bya ba la sogs pas bdag nyid kyi rigs pa gzhan gyis ston par mdzad do // 和訳については戸崎 [1985: 70, 注(60)] を参照。

- ⑤ Cf. PVin I(Skt) 58ab: bāhye 'py arthe tato 'bhedo bhāsamānārthata-dvidoh /.
- ⑥ Cf. PVin I(Skt) p. 43, 4-5: saty **api bāhye 'rthe** sahopalambhaveda-nābhyāṃ **bhāsamānasya** nīlādes **tatsamvidāś** cāvivekaḥ siddhaḥ. 太字は訳者による。
- ⑦ PVinT(Dh) P 192b3-7/D 165a4-6: rnam pa med pa'i phyogs la dmigs (P 192b4) pa'i don ni 'dres par snang ba'i don yin shing / de yang de ltar gsal ba yin no // des na dmigs pa'i don gzhan yin la / rig pa'i don kyang gzhan yin no zhes gang brjod pa de gsal ba yin no // de'i phyir (D 164a5) de ltar (P 192b5) rnam pa med pa'i phyogs la dus mnyam par snang ba'i don gsal ba'i don du lhan cig dmigs pa nges pa dang / rig pa gtan tshigs su brjod yin no // rnam pa dang bcas pa'i phyogs la ni gzung ba'i rnam par (P 192b6) snang ba (D; gnas P) tha dad par mi 'dod de / de'i phyir rnam pa dang bcas par smras pa la yang / slob dpon (D 164a6) gyis (P; gyis / D) de'i phyir snang don de blo dag / ces bya ba la sogs pas rnam pa med pa'i phyogs sel ba gnyis po 'di nyid ston (P 192b7) par 'gyur ro //.
- ⑧ PVṬ Ñe P 255a2-3/D 206b5: dga' ba la sogs pa bzhin du gsal bar (P 255a3) nyams su myong ba nyid kyi phyir ro //.
- ⑨ PVṬ Ñe P 255a6-7/D 206b7-207a1: de bzhin du sngon po la sogs pa yang rang nyid rtogs pa'i bdag nyid can yin gyi gzhan gyi char gyur pa ni ma yin te / bde ba la (D 207a1) sogs pa bzhin du rang rig (D; rigs P) pa'i bdag nyid can nyid yin pa'i (P 255a7) phyir ro //.
- ⑩ PVinT(Dh) P 183a2/D 157a6: ... gzung ba'i rnam pa gsal ba yang mi bden na /.
- ⑪ PVinT(Dh) P 182b8/D 157a5: ... gang ji snyed snang ba de kho na ltar thams cad bden pa ni ma yin te / 'khrul pas med pa yod snang ba'i phyir ro //.
- ⑫ PVinT(Dh) P 184b8-185a2/D 158b7-159a2: ci ste mi bden pa yang

yod na ni brgya byin gyis kyang (P; kyang / D) shes pa mi bden pa gsal bar byed pa'i (P 185a1) nus pa bsnyon par mi nus so // 'dod du (D 159a1) zin kyang nyams su myong ba thams cad bden pa yin par ni sus kyang gzhag par nus pa ma yin pa'i phyir shes pa'i mi bden pa gsal ba'i nus pa las 'da' bar (P 185a2) bya ba ma yin no // mi bden pa'i rang bzhin nyid ma rig pa'i dbang gis ston par byed kyi (P; pa'i D) bden pa ni ma (D 159a2) yin te /.

- ⑬ PVinṬ(Dh) P 185a4-5/D 159a3-4: dga' ba la sogs pa'i rang bzhin (P 185a5) yang dag (D 159a4) pa'i (P; par D) rig pa ni spang bar bya ba ma yin te / gnod par byed pa med pa'i phyir ro //.
- ⑭ PVinṬ(Dh) P 185a5/D 159a4: des na gcig ma yin no zhes bya bar gnas so //.
- ⑮ PVinṬ(Dh) P 184b7-8/D 158b7: ... snang ba gang (P 185b8) yin pa de thams cad yod pa yin na ... //.
- ⑯ Cf. PVin I(Skt) p. 40, 2-3: na hy anayor ekākārānupalambhe 'nyopalambho 'sti.
- ⑰ PV III 390abc: nārtho 'saṃvedanaḥ kaścīd (<sup>1</sup>anartham vāpi<sup>1</sup>) vedanam / dr̥ṣṭam saṃvedyamānaṃ ... // (<sup>1</sup>) 著者は anarthasyāpi を anartham vāpi に訂正している。戸崎 [1985: 72, 注(67)] を参照).
- ⑱ PV III 388: sakṛtsaṃvedyamānasya niyamena dhiyā saha / viṣayasya tato 'nyatvaṃ kenākāreṇa sidhyati //. 和訳については戸崎 [1985: 70] を参照。
- ⑲ PVinṬ(Dh) P 185b2-3/D 159a7-159b1: shes bya dmigs (D 159b1) pa ni shes pa dmigs pa'i bdag nyid can nyid yin gyi gzhan du ni (P; omit. D) ma yin la / shes pa dmigs pa yang shes bya (P 185b3) dmigs pa'i bdag nyid yin no ... //.
- ⑳ PVP Che P 261b1-2/D 222b7: sngon por dmigs par gyur pa nyid ni sngon por yang dmigs par 'gyur te / (D; ro // P) de bzhin du sngon po yang (P 261b2) dmigs par gyur pa na (P; na / D) de dmigs pa yang dmigs par 'gyur ro //.
- ㉑ PVP Che P 261b3/D 223a1-2: de'i phyir tha dad par snang ba nyid



yin na yang gcig tu dmigs pa'i phyir gcig nyid (P; nyid du D) yin te / zla ba gnyis pa (D 223a2) bzhin no //.

- ⑳ PVBh p. 410, 6-7: indudvayābhimatam evādvayam ekavijñānāntar-gatatvāt.
- ㉑ PVBh p. 410, 5-6: tasmād uttarakālabhāvinā vikalpenānvayavyati-rekābhyām iti dvayabhedakalpanā na pratyakṣā pratīṭh.
- ㉒ PVinṬ(Dh) P 187b1-2/D 161a3: dus tha dad na yang myong ba tha dad par nges par (P 187b2) 'gyur te / dus tha dad pa yang dngos po tha dad pa'i rgyu msthan yin pa'i phyir ro //.

\* 訳者付記

本和訳作成に際して三代舞氏（早稲田大学非常勤講師）から多大な助言を頂いたことをここに感謝申し上げます。また、原著の翻訳を快諾して下さった著者の岩田孝先生に心よりお礼を申し上げます。

（本稿は科学研究費補助金（課題番号 16H01901）に基づく研究成果の一部である。）